会員のひろば

古きをたずねて（その二）

美唄歯科医師会会員　雨田　実

前号の会員の広場に東京千住の俗にいうオバケ煙突のことを書いたところ，道歯会の先生の数名の方々からお電話をいただいた。ほとんどの先生が皆ご年配であり，往時をなつかしむご年配であるのには，少々淋しい気がしないでもない。戦前から戦後しばらくの間，東京以北には歯科大学は皆無であったので，道内の遊学生の大部分は東京の大学に進学した。

そのうえ，その時分は現在のように東京へ空路を利用する学生はまれの頃であったであろうから，東京の北門にあたかも関所の如くそびえ立つ煙突に見送られ，出迎えられての幾秋霜を，住宅難，食糧難と戦いながらの夢多き頃のほろにがき時分を，現在が物質的に豊かなだけに，かえって懐かしく思われるのかもしれない。

走る車内から，角度によって３本になったり２本になったり，ついには１本の太い煙突に見えた煙突が特に印象に残っているのかもしれない。昔は高いビルも少なく，二階の物干しからも見えたし，遠くは日本橋，深川辺りの学校の屋上からも見えたので，子供達には特に人気があったし，どことなく下町に溶け合った風情があったように思われる。それが映画「煙突の見える場所」（五所平之助監督）の舞台にもなった所以（ゆえん）でもあろうか？　その頃は随分と太く高かったように思ったが，高さの程は分かりかねるけれど，現在池袋のノッポビルサンシャインが240ｍであり，東京都内の各清掃処理工場の煙突が，大体150ｍとのことであるので，大体の見当は付く。その後の高度成長と産業近代化の波には勝てず，解体の運命となったとのことであるが，昭和40年代後半の頃であろうと思うけれど，確かには分かりかねる。今でも私は上京すると，荒川区の旧友を訪ねる折には，必ず立ち寄ることにしている懐かしい場所の一つである。（東京電力の火力発電所は荒川，小竹橋のたもとにあった）橋のらんかんにもたれて流れを見ていると，お化け煙突が川面にユラユラと浮かんで来そうに思われて懐かしさでいっぱいになってしまう。あたりの風景は一変してしまったけれど，現在も変わらないものは，昔から付近には，６大学はじめ昔以上の多くの大学の，ボート部の合宿所があるらしく，練習風景は昔とかわらず，エイトのコックスの高らかな声を聞くことが出来るのは懐かしい風物詩である。

我が街の囲りにビルの多く建ち，富士も筑波も見えぬ寂しさ。

富士白く筑波は蒼く冬晴れに，まさやかなりし，目路（めろ）のかなたに。

老いの感傷としてお笑い下さい。